

印刷時報株式会社 取締役会長

後藤 光二

PRI・O  
トップ対談

大阪府印刷工業組合 理事長  
高野山印刷産業人納骨塔奉讃会会長  
大阪印刷関連団体協議会会長

浦久保 康裕



大阪の印刷および関連業界を挙げて建立した「大阪印刷産業人物故者納骨塔」が本年、建立から半世紀の年輪を刻み込んだ。聖地・高野山 奥の院大霊園中央にひとときわ高く立派な納骨塔が完成したのが1973年(昭和48年)8月のこと。以来、高野山印刷産業人納骨塔奉讃会では開眼法要を営んだ8月20日前後の土曜日を期日として業界法要を執り行ってきたが、時が過ぎ、業界の世代交代が進むにつれて、大阪業界の一大事業として全国に誇った納骨塔への関心は徐々に薄れ、近年の参加状況にも反映されている。そこで、50年の節目を機に建立に至る経緯や目的、そしてこれまでの歩みを辿りながら、今に生きる業界人の理解と協力を仰ぐとともに、次代へ伝承していく道筋を探る思いで、印刷業界紙の立場から当時を知る印刷時報株式会社 取締役会長の後藤光二氏と高野山印刷産業人納骨塔奉讃会会長でもある浦久保康裕理事長による特別対談を企画した。



大阪印刷産業人物故者納骨塔  
厳寒の風雪に耐えて50年、建立に懸けた大阪印刷産業人の想いとは

**浦久保:** 今年8月、先人の熱い思いで建立された高野山の大阪印刷産業人物故者納骨塔が半世紀の年輪を刻み込みます。この納骨塔完成は当時、大阪の印刷産業界が心をひとつにした結束力を全国に誇るとともに、一大事業として注目を浴びました。以来、開眼法要が営まれた8月20日前後の土曜日に業界法要が執り行われ、建設に携わった多くの諸先輩の精神が今日に受け継がれてきました。しかし、残念なことに近年、業界の世代交代が進むにつれて身内や自社の関係者が納骨されているにもかかわらず、これまでの経緯が分からないことで認識は薄く、なかには納骨塔の存在さえ存じない経営者の方もおられ、毎年の法要開催への参加者も減少傾向にあります。そこで、この建立50周年を機に建設に至る経緯や目的などをしっかりと確認したうえで何らかの形でPRしていきたいと考えています。私個人としても理事長の大任を仰せつかった以上、いかにして先輩

の偉業を次の時代に伝承していくか、少しでもいい形を取り戻したい、そんな思いで本日の対談を企画した次第です。よろしくお願いたします。  
まず、建設に至る経緯や当時の業界動向など、外部から見られた様子についてお願いします。

**後藤:** 大阪での法要は、納骨塔建設以前より物故者慰霊祭という形で執り行われていました。正式に組合事業として形づくりされたのは1959年(昭和34年)です。印刷振興月間行事のひとつとして我が国に近代印刷技法をもたらした本木昌造翁の偉業を偲ぶ「本木祭」や従業員表彰式、写真コンクールなどと一緒に10月の月間内に四天王寺本坊において行われたのが始まりと聞いています。

1961年(昭和36年)まで四天王寺で開催され、1962年から納骨塔完成の前年までは北区の太融寺に会場を移して開かれています。

高野山での納骨塔建設は、当時の大阪府印刷工業組合(以下「大印工組」)理事長を務められていた重政重職氏ほか、役員経験にわたる悲願でもあったようです。

そうこうするうちに、業界に大きなチャンスが訪れました。1970年の大阪万博の開催です。「人類の進歩と調和」をテーマに千里丘陵において183日間にわたって開かれ、延べ6,422万人、実に国内人口の半数以上の観客動員数だったそうです。このお蔭で大阪は道路が整備され、経済的にも万博景気の恩恵を受けました。

この万博に合わせて、大阪で「第19回印刷文化典」が開催されました。印刷展や機材展をはじめ、アジア太平洋印刷人会議も併催されるなど、かつてない空前のスケールで大成功を納めましたが、この文化典開催を機に発案者の重政理事長による理事会提案が承認されて納骨塔建設計画は具体化の第一歩を踏み出すことになったわけです。

## 印刷業界が心をひとつに一大事業として完遂

**浦久保:** 建設には当然のことながら多額の資金を要したわけですが、業界の反応はどうだったのでしょうか。

**後藤:** 一部に宗教の違いや自前のお墓もあって分骨を好まない人のネガティブな意見もあったようですが、大勢から賛同が得られたと記録されています。その後、大阪業界の結束力が全国に示されることになりました。

**浦久保:** 資金の問題もあり、工業組合だけでは難しく、関連業界の賛同を得て、業界がひとつになったわけですね。

**後藤:** そうですね。26の団体が加盟する大阪印刷関連団体協議会（以下「印関協」）が計画推進の母体となって建設委員会が結成されています。重政理事長自ら委員長として計画に対する賛同を得るために奔走され、時には組合会合を現地の見学を兼ねて高野山に会場を設定して開催されたこともありました。最終体制の確立までには結構時間を要したそうです。

こうした結果、5,000名を超える府下の印刷関連業の経営者や社員の方々から7,080万円もの寄付金が寄せられています。組合事業に従業員が金銭面で協力することは

極めて希な事例でしょう。そして1973年に完成。建設費は6,700万円余と記録されています。

**浦久保:** 建設地には高野山が絶対条件だったのでしょうか。

**後藤:** 記録によると、奥の院大霊園内に大掛かりな霊園が造成されていることを、霊園管理者の身内の方と親交があった重政理事長が知り、ここからパイプが繋がったそうです。

**浦久保:** 余談ですが、こうした納骨塔は他府県にも建設されていますか。

**後藤:** 私が知る限りないように思います。あっても大阪ほど立派なものはないでしょう。

**浦久保:** そうでしょうね。いずれにしても建立には多額の資金を要するわけですから大変だったと思います。

ところで、完成後の法要は参列者の数も多く、1泊2日の日程で開かれているようですが。

**後藤:** 人数的には昨今の倍以上でしょうか。他府県の役員さんも参加された年もあ

りましたし、印関協からの参加だけでなく、大阪府印刷工業厚生年金基金も独自に受給者による1泊2日のバスツアーを実施して参加していました。

**浦久保:** 少し話を戻しますが、当時の印刷業界にとって、納骨塔建設の必要性はどこにあったのでしょうか。

**後藤:** 先輩のご冥福を祈り、印刷業界の繁栄を祈念することは、昭和34年から納骨塔完成まで市内で行われてきた業界物故者慰霊祭に裏付けされていますが、高野山と関わりが深かった重政理事長の「先輩を敬う気持ち」と「先人の努力があって今がある」という考えに指導力と説得力が加わり、心の拠り所を建設したいという考えに皆様が賛同された結果だと思えます。発展途上で躍進する当時の印刷業界を、後に続く人たちに知らしめるひとつの方法だったのではないのでしょうか。

完成後、重政氏は「多額の資金を要するだけに不安もあった。しかし、大印工組役員をはじめ、建設委員会ほか、業界の皆様の絶大なる支援で長年の悲願が達成できた。大阪における印刷産業の力を全国に示せることになった」と感慨深げに述べられています。

府県にないものを実現させて全国の注目を集めたことは、素晴らしいことです。

完成から5年、10年、20年と経過し、建設に携わった先人の熱い思いが今日にどのように受け継がれてきたのか。業界を外からご覧になっていかがですか。

**後藤:** 先ほどお話ししたように、一部に生みの苦しみもあったようですが、大勢から支持された建設事業です。これまでの役員、あるいは業界人のほとんどが納骨塔を目の当たりにして当時の偉業を確認され、必要性を実感されたことがごく自然な形でそれぞれの時代の役員や業界の人達に引き継がれてきたように思います。

## タイムカプセル埋蔵100年後の開封へ

**浦久保:** 印刷業界の成長過程を後世に示すという点では、納骨塔碑文の下に100年後に開封するタイムカプセルが埋蔵されていますね。我々は中身を確認できないだけに残念ですが(笑)。

**後藤:** これは、当時副理事長を務められていた岩岡印刷の岩岡敏志社長の提案で行われ、開眼法要から2ヵ月後の10月10日、印刷振興月間行事のひとつとして埋蔵式が行われています。カプセルには「第19回印刷文化典」の資料や当時の印刷資料のほか、寄進者の資料が収納されています。

100年後、その時代の業界人が100年前の業界がどうであったのかを知る貴重な資料となるでしょう。100年後に開封したら次の100年を目指すという構想です。

**浦久保:** 先人を敬う気持ちに当時の役員の方がリーダーシップを発揮され、それに業界全体が賛同し、印刷関連が1枚岩となって建立を実現させたことに深く感銘を覚えますし、私個人としても大変嬉しく思います。

**後藤:** 指導、説得力を発揮した業界役員に協力を惜しまなかった当時の大阪印刷業界人の「人の利」、高野紙や高野本の木版活字などでも印刷業界と関わりが深い聖地高野山という「地の利」、そして高度経済成長に万博景気が加わった「時の利」が納骨塔建立を力強く後押しした結果ですね。

**浦久保:** そうですね。もともと大阪が持つ気風みたいなものがメインの力となって他



## 諸先輩の再会の場に納骨塔の役割および

**浦久保:** 高野山事業に限らず昔の組合事業には、昭和の良い時代というか、和やかに行われ、法要にしても家族ぐるみの参加が多くみられました。

**後藤:** そうした傾向も時が過ぎ、業界の世代交代が進むにつれて薄れているように思います。世代交代が進んで業界が活気づくことは良いことなのですが、その反面、古いことが段々と薄れていくことは寂しいですね。

これまで納骨塔は、大阪の印刷産業人の心の拠り所として納骨塔本来の役割に加え、「お久しぶりです」「〇〇さんはお元気ですか」といった挨拶と歓談の場が法要当日は随所に見受けられ、第一線を退かれた経営者や幹部の方達の再会の場としての役割

も果たしてきました。

**浦久保:** OB同士の再会場面は結構あったんですね。行事として素晴らしいことです。

この半世紀の歩みは、厳冬の高野山の風雪にさらされた50年であり、問題も発生しました。厳しい自然環境下に納骨塔内の格子天井板が雨漏りで損傷するなど、過去に2回ほど補修工事を施して相当な費用も発生しています。

高野山には立派な納骨塔が多く建立されていますが、なかにはさびれている納骨塔もあります。業界や企業の認識や記憶が薄れて傷んでいるのは寂しいですね。経年劣化はある意味仕方ないと思いますが、意識の希薄による劣化は問題です。それと記憶

## 心の拠り所として好ましい姿で次代へ

**後藤:** 確かに近年、古くから関わってこられた方は少なくなっており、また時が経つにつれて納骨されたご遺族の方も他界されるなど、納骨塔との関わりがなくなっていることもあるでしょう。こうした状況を踏まえたPRが大切だと思います。

**浦久保:** そうですね。50年ではほとんどの企業で世代交代が行われていると思いますし、この先、機会をとらえてPRしていきたいと考えています。

ひとつの例として、最近では墓じまいされる人もあるなど、お墓に対する考え方が少し変化していますね。こうした時だけに、信じら

れないほどの価格で永代供養ができますから、業界に関わる人や身内、社員の方の納骨にご利用願いたいと思います。高野山 奥の院大霊園中央にひときわ立派な納骨塔が建立されています。一度でもご覧になればきっとご理解いただけるものと思います。

**後藤:** 言わば大阪印刷産業界の財産で1人ひとり、とくに若い経営者や幹部の方に関心を持っていただくことが大切で、そのためのPRが必要になっています。50年前の精神を大切に守り、偉業の結晶である納骨塔が少しでも好ましい姿で未来に伝承されていくことを切に願います。役員の皆様には大変ご苦労を

の風化というか、古くから携わってこられた方達がおられなくなっていくときどうするか。これまでの50年に比べてこれからの50年には高野山の風雪による被害が一層懸念されることから、正直なところ維持、管理に皆様方からの浄財を必要としていることも事実です。

私自身、理事長の重任を拝命したことで皆様の話を聞く場や年1回高野山へ赴く機会を得て理解できますが、冒頭お話ししたように、おじいさん、おばあさんのほか、身内や社員の方の納骨があっても存在をご存じない経営者が出てきた今後をどう捉えるか。建立の精神をしっかり守って次代伝承をどのように図っていくか、工夫することの必要性を痛感しています。

おかけしますが、よろしく願いたします。

**浦久保:** はい、分かりました。理事長を拝命して思うことは、「先人の努力があって今がある」、そうした考えが強くなって諸先輩が成し遂げた偉業を大変ありがたく思うようになりました。納骨塔に関わる機会を得たことは私にとってもある意味財産のひとつです。業界で事の推進にはまず「まとまる」ことの大切さを痛感しています。建立50周年、少しでもいい形で伝承していきたい、現在に生きる皆様のご理解とご協力を心からお願いして本日の対談を終わりたいと存じます。ありがとうございました。

## PROFILE

後藤 光二

1941年生まれ、熊本県出身。荒尾市立高等学校卒業後、大阪市内の鉄工所、プラスチック会社、印刷インキ会社を経て印刷業界紙「印刷ジャーナル」を発行する(株)印刷時報社へ入社。1994年には印刷時報(株)代表取締役役に就任。2013年に取締役会長に就任し、現在に至る。